

石川淳『至福千年』論

―〈歴史〉を問う小説

一、はじめに

石川淳の「至福千年」は岩波書店刊行の総合雑誌『世界』に一九六五年一月から一九六六年一〇月に連載され、その後一九六七年二月に刊行された長編小説である。石川淳の長編小説全般に言えることではあるが、一つに集約できないさまざまな論点を含む魅力あるものである。そこで本論では発表された同時代状況を踏まえながら論じていきたい。この小説は一見すると、伝奇小説や幻想小説として捉えられるが、一九五〇年代後半から晩年まで、石川淳が書いた小説に連なる〈歴史〉を問うというモチーフが通底しているとも指摘できる。

この小説では、一八五八年（安政五年）から一八六四年（元治元年）の幕末の騒乱を背景に、安政の大獄、桜田門外の変、

坂下門外の変、生麦事件、天誅組の変、生野銀山の変、蛤御門の変、長州征伐など、歴史的事実として記録に残されている裏側に、幕府も朝廷も転覆させ、「千年王国」の樹立を狙う隠れキリシタンが集団がいたと設定されている。しかし最後はこの隠れキリシタンたちの企てもまた潰えてしまう。

このような物語内容から、刊行当時の反応を見ると、安部公房は「至福千年」に〈革命〉の敗北を見ている。一方河上徹太郎は、「これは諷刺のための諷刺である」と現実（史実）にあったことと比較してみるのではなく、石川淳の精神の運動が現れた文学的営為として高く評価している。石川淳の小説が現実に対応していたのか、それとも現実から切り離されて屹立としていたものだったのか、この二人の評価は石川の文学活動に対する評価の総体を表しているようにも見える。

帆
莉
基
生

現実世界での〈革命〉をモチーフにした小説を書き続けた石川は、一九五〇年代後半から現実・現代を舞台にすることをやめ、〈歴史的空間〉に舞台を移すようになる。それを菅野昭正¹など、フランス文学出身の評論家たちは「物語が純化」された「自律的な空間」であると、石川の小説を象徴詩と並べて評し、現実の問題からは切り離されたものであると高く評価していく。

一方で、石川が〈歴史的空間〉を舞台にした小説を書くようになることについては、山口俊雄²や杉浦晋³などは、当時の社会状況や国際的な体制の変化を見ていたからだという指摘をしている。だからこそ現実社会での革命を夢見ることを諦め、歴史的空間に韜晦していったと捉えられている。

しかし本論では歴史的空間に小説の舞台を変えた石川の試みを積極的に評価するとともに、その試みが「至福千年」で中・短編小説から長編小説へと舞台を移し、「狂風記」を始めとした晩年の長編小説へと繋がる礎を築いた点を高く評価したい。あわせて本稿では、石川が同時代の状況を見据え、積極的に呼応していたことを論じていきたい。

石川が〈歴史〉を舞台にした小説を書き始める一九五〇年代は、〈歴史〉が問い直され、また大きな歴史の中に埋もれていた〈民衆〉の存在が浮かび上がってきた時期でもあった。これらの小説は権力者が都合良く編纂した〈正史〉を〈民衆〉が揺るがしていくものであるが、「至福千年」もまた歴史から消さ

れた隠れキリシタンたちを置くことで、権力者が作った歴史だけではない、もう一つの〈歴史〉があった（かもしれない）ことが描かれる〈偽史〉の物語であると言える。

一九五〇年代後半から石川がこのような小説を書くようになったのは、歴史の中に埋もれた人々に目を向けようとする国民的歴史学運動などと呼応していたと言える。〈歴史〉にはさまざまな諸相があることを文学を通して向き合い表現しようとしていた石川の姿が垣間見える。

石川のこれらの小説は権力者によって都合良く書き換えられていく〈歴史〉に目を注いでいる。それは維新の志士と朝廷勢力によって、近代が切り拓かれたと語られる「明治政府史観」に懐疑的な姿勢を示す「至福千年」にもつながっていると言えるだろう。

二、一九六〇年代の伝奇小説ブーム

しかし「至福千年」はこのような〈歴史〉を問う小説としては、受け取られてはいない。岩波文庫に収録された際カバ¹文にはこのように紹介されている。

内外騒然たる幕末の江戸、千年会的首魁・加茂内記は非人乞食をあやつって一挙に世直しを狙っていた。手段えらばぬ内記に敵対するはマリヤ信仰の弘布者・松太夫。これら隠れキリシタンたちの秘術をつくした暗闘のうちに、さして地上楽園の夢のゆくえは――不思議なエネルギーをはらむ

長篇伝奇小説

このカバールの紹介からも「至福千年」は「伝奇小説」として受容されていることがうかがえる。

また須永朝彦は『日本幻想文学史』の中で、戦前から幻想・怪奇の作風を示した作家の中に石川淳を挙げている。そこでは「戦後に『鷹』『紫苑物語』などの傑作を書き、晩年八十歳を超えても『狂風記』『天門』『蛇の歌』などアナーキーな怪作を発表している」と石川淳とその作品を幻想的な作風の作家とその作品として位置づけている。一九五〇年代中頃から書かれてきた石川の（偽史）の小説も、ここに来て「伝奇小説」あるいは「幻想小説」として受容されていることがうかがえる。一九九〇年代になると国書刊行会が新編日本幻想文学集成の刊行を開始し、石川淳もそのラインナップに加えられることになる。

しかし「至福千年」の文庫が刊行された一九八〇年代や幻想文学が（ジャンル）として関心を持たれるようになる一九九〇年代になって突如として石川が幻想文学として受け取られるようになったわけではないだろう。なぜなら「至福千年」が岩波書店の『世界』に連載されていた一九六〇年代末には「伝奇小説ブーム」が起こっており、このような中で、あるいはそれに先駆けて「至福千年」が連載・刊行されたという点は押さえておく必要があるのではないだろうか。

『読売新聞』（一九六九年六月九日朝刊）では伝奇小説ブームを「最近出版界では、戦前はやった伝奇小説（時代劇）の再版

ブームだが、テレビでもこのブームに注目」とこのように伝えている。ここでは伝奇小説とは「なぞの怪奇伝説、埋蔵金、秘宝などを題材に人間の素朴な秘密探求欲に答えながら、波瀾万丈の筋で楽しませる大衆文学」であると紹介されている。

なるほど、このような文脈の中で、文芸誌ではなく総合雑誌『世界』の中の〈読み物〉として、石川淳の「至福千年」が求められたのは容易に想像できる。同じく『読売新聞』の一九七八年一月三〇日朝刊の「読書」欄では「最近の《大衆小説》多種多様な展開を示す」では、伝奇的な小説を書く新進作家の作品が直木賞の候補にもなっていることを紹介している。

この二つの記事の約一〇年の間を石川淳の作品史に置き換えれば「至福千年」の刊行から「狂風記」の連載の終盤にあたるわけで、晩年の石川淳の長編小説群はこのような伝奇ブームに上手く乗ったと言えるのかもしれない。

たしかに「至福千年」は妖しい力を使って権力を奪取しようとする集団が跋扈する「波瀾万丈の筋」を持っている点などは、まさに伝奇小説的な要素を備えている。ではこの小説が有する「素朴な秘密探求欲」とはなんだろうか。それは公に語られる、日本の近代の物語の裏側を暴くところにあるのではないだろうか。

三、歴史小説論争の間——〈歴史〉が問われる

「至福千年」が刊行された一九六七年は、文学（小説）における、〈歴史〉とその真実性について議論された、二つの論争

の間にある。

論争の一つは一九六一に起きた「『蒼き狼』論争」であり、もう一つは一九七一年に起きた「フォニイ論争」である。

「『蒼き狼』論争」は、井上靖がチングスハンを書いた『蒼き狼』をめぐって、大岡昇平が、井上が『史実』をないがしろにしていると批判したことをきっかけに始まったものだった⁽⁸⁾。

歴史小説は近代の産物で、歴史的人物を人間的に書くのを原則とする。人間とは無論現代人であるわけではないが、現代的動機のために、歴史を勝手に改変してい、かという⁽⁹⁾と、そうは行かない。(略)歴史的事実に尊敬を払わなければ、イリュージョンは消え、作品は歴史でもなければ、小説でもないという、空虚の中に落ち込む。

大岡は井上が『史実』を改変し、『想像』によって書いていると痛烈に批判し、歴史小説のあるべき姿を提示する。しかし大岡の『史実』に厳密な姿勢に対して、「窮屈さ」を感じた井上らの反論がなされることで論争が拡大していく。

成吉思汗という人間の持つているある面を、それを小説化することに於て解決しなかったのである。小説家の歴史に對する対い方は、歴史学者の解決だけでは説明できないところへはいって行き、表面に見えない歴史の一番奥底の流

れのようなものに触れることではないか。

大岡氏は史実だけを取り扱った史実小説しか歴史小説として認めてはいけないものの如く受け取れるが、史実だけを取り扱うにしても、なおそれが文学作品である以上、作者は史実と史実の間にはいつて行かなければならぬ。

私は氏の歴史小説というものに対する考え方をひどく窮屈なものに感ずる。

井上は「史実小説」≡「歴史小説」という大岡の見方に反論するのだった。この論争について福田宏年は小説(文学)には史実とは違う、「文学的真実」というものがあると主張し、井上の肩を持つ。『蒼き狼』論争は、当時現代仮名遣いについても論争をしていた大岡が、今は共闘すべき時だと『停戦』を申し入れることで、終結することになった。

この論争で問われた、歴史的事実と小説の関係をめぐっては、論者を別にして、約十年後に引き継がれることになる。一九七一年末、一年を振り返った座談会の中で江藤淳⁽¹⁰⁾が辻邦生、加賀乙彦、小川国夫が歴史を素材に書いた小説を、まがいもの「フォニイ(PHONY)」と称し、現代文学が衰退していると危機を表明したことに対して、フランス文学者の平田篤頼⁽¹¹⁾らがそれにかみついたことで論争に発展した。

ここで平田は「もともとぼくには、もっと根本的にすべての

文学は「まがいもの」だという観念があつて、文学に「ほんもの」を求める人の気持がどうしても理解できない」と小説（文学）はそもそも「ほんもの」ではなく、「まがいもの」であると主張している。これは反対に言えば、「史実」や客観的事実とは必ずしも一致しない「文学的真実」があるという福田の主張と重なるものがある。

平田の批判に対して、江藤淳も平田を批判するという応酬がなされるが、実はこれと同じ号の『文学界』に掲載されたのが大岡昇平「歴史小説の諸問題^⑪」であつた。ここでは菊池昌典^⑫の司馬遼太郎、松本清張批判に関連して、一〇年前の『蒼き狼論争』が振り返られる。ここで大岡は読者が史実をないがしろにして享受していくことと「歴史修正主義」を同列に論じていく。

それは今日「坂の上の雲」を耽読する「庶民」が、一九三〇年代に吉川英治の「宮本武蔵」を読んで、日本のファッショ化に追隨して行つた「国民」と同じ道を辿るのではないか、との危惧にあることが察せられる。

大岡は「史実」をないがしろにする姿勢が「歴史修正主義」へとつながり、それがファッショ化へとつながっていくと断じる。大岡のこのような発言の背景には、『明治百年』言説』などの文化人によって偽史、偽伝が書き進められている現状に對

する危機感が背景にあつたことがうかがえる。

「至福千年」はこの論争の間の時期に発表されている。先に述べたが、実は「至福千年」についても、歴史的事実と想像力の関係について議論がなされていた。『文藝』の一九六七年五月号で行われた「座談会 現代文学における「私」と虚構^⑬」では司会の丸谷才一に秋山駿、柴田翔、竹西寛子、野口武彦、日野啓三が参加して、「至福千年」をはじめ、当時発表されたいくつかの小説をめぐる議論が交わされた。

「至福千年」をめぐる竹西寛子が、「借りる世界と趣向ということから、歴史小説とフィクションの関係をちよつとつかがつてみたいのですが」と提起している。

しかし、どの時代に世界を借りるにしても、多数の読者の既知の事実というか、たくさんの人に共有されている過去というものは、現代人が勝手に変えることはできない。非常に制約のある世界だと思ひます。そういう事実の制約にあえて関係することとフィクションの関係、想像力のはたらかせ方なんです。

ここで竹西は誰もが知っている事実（史実）があると、フィクションの想像力にどうしても制約を受けてしまうのではないかと述べている。それを受けて日野啓三が、そもそも「歴史とはフィクションです。つねに現在の最関心事によって書き直さ

れ、つくり変えられますよ」と《歴史》そのものが常に揺らぎゆくものであると述べる。これらの議論を受けて、野口武彦が「至福千年」に対して、石川淳がそもそも《歴史的事実》を書くことには関心がないということを述べている。

ですから『至福千年』が連載されたときに、いちばん楽しみでもあり心配だったのは、つまり一八六八年に明治維新が起ったということは、動かない事実でしょう。実際の歴史と想像力が勝負するわけですが、それをどういうふうにして仕上げるかということ、面白くて読んだのです。つまり天秤の片方に実際の歴史があり、片方に想像力があつてことばがつくり出す虚構の空中楼阁が、どれだけ読者の心をとらえるかということですね。そういうもののしか石川淳さんの場合には、認めてないわけですね。

座談会での議論を見ていると、二つの歴史小説をめぐる論争で議論されていた《真実性》という土俵に「至福千年」は上がない。歴史的事実を用いながらも、《史実》云々を議論する余地をこの小説は持たない。それでは「至福千年」で描かれる《歴史》とは一体なんなのだろうか。

その前に、この座談会では全体的に「至福千年」に対して比較的好意的な評価が多いのに対して、秋山駿と柴田翔の二人が「フィクションのなかの人間が、独立」していないことを否定

的に捉えていることに触れておきたい。

しかし秋山が否定的に感じている「人間が、独立」していないことこそ、この小説の特質ではないか。それについての詳細は後述したい。

三、明治百年問題―近代を問う

「至福千年」刊行当時は、翌年の一九六八年を控え、「明治百年」問題についてさまざまな議論がされている時期でもあった。先行研究でも言及されているが、ある意味では、そのことをいち早く指摘したのは、篠田一士⁽¹⁾ではないかと思われる。と言うのも、篠田は同年に刊行された大江健三郎の「万延元年のフットボール」について「大江氏がこの小説のなかに明治百年そして、この課題の中心的論点となる天皇制の問題をとりあげようとしたことはほぼ推測できる」と言及しているからだ。そして大江の長編小説に石川淳からの影響を指摘していることは見逃せない。

石川淳の作品、とくに『白描』にはじまって『和魂』(『荒魂』※帆苅注)や『至福千年』にいたる長編小説の影がそこに色濃く認められる点である。石川氏を孤高の作家として遇するのは文壇の大方の習わしであるが、事実はさにあらず、今日の三十代の有為な文学者に圧倒的な影響力を与えているのは氏をおいてほかにいないのではないか

この評言をいささか無理矢理ではあるが、反転させれば「万延元年のフットボール」の重要なモチーフである「明治百年」問題、すなわち日本の〈近代〉の歩みへの問いは、「万延元年のフットボール」を書いた大江健三郎が影響受けたとされる石川淳の「至福千年」の中でも問われていると言えるのではないだろうか。

山口俊雄の「石川淳『至福千年』論―〈憑依〉の論理学・〈憑依〉の政治学^⑧」の中でも、「至福千年」の中で開国から江戸幕府の崩壊に至る過程を好意的に描いている点は、「明治百年」言説の中で明治維新をたたえるものと重なるものと指摘している。しかし山口はまた「自閉的自己愛的近代日本人像とは対極的な見通しを石川は提出したのである」と言及している。つまり「至福千年」で描かれるのは、〈維新の志士〉によって切り拓かれていった日本の近代とは違うもう一つの〈近代〉のはじまりであった。

「明治百年」は、以下引用する自由民主党の「年度運動方針」^⑨からも分かるとおり、〈国家の物語〉として、政府・自民党から積極的に語られたものでもあった。

日本近代化の源流は明治維新に求める。この出発点に立つて、国家民族の向かうべきところ、すなわち物質文明と精神文明を総合的に調和し、世界の中の日本の地位を確立し、輝かしい未来への跳躍台とすることがわが党の一大使命で

ある。

（略）

明治百年を契機として、さらに新しい歴史を創造するにあたり、われわれはまず道義の確立と、祖国愛のに高揚にその基調を求めようとするものである。党は永遠に躍動する民族の生命力の中に民族精神の高まりを期待し、汚醜を排して、高く、清く、美しい道義の確立を目指して進むものである。

また当時の首相の佐藤栄作は一月四日の伊勢神宮参拝の後の記者会見・六日年始の閣議での発言で以下のように述べている。^⑩

・記者会見

今年一番大きな記念すべき政治行事は明治百年だ。その意味で昨年来いろいろ準備してきたものを展開するが、これが今年の基本になる。

・閣議

明治百年に臨むにあたり、健全な民族精神を育てる必要がある。このことを国民に心から訴えたい。明治百年は厳しい年だが、祖国のために力を尽くそう。

こうして、一九六八年の一〇月に政府主催の明治百年記念式

典が行われることになる。国家主導の「明治百年」とそれをめぐる言説には、賛否両論の意見が飛び交うことになりさまざまな議論が提示される。^②

結果的に〈国家の物語〉に収奪される形になった「明治百年」だが、そもそも提唱者である竹内好自身が「明治百年」をめぐる現状を以下の通り述べている。

ところが今になると、政府が音頭をとってやろうというわけでしょう。そういうことには、わたしは絶対に反対なんです。政府がそういう文化の領域に口を入れてはならんと思うんです。ところが政府の文化への介入はいろんなところに出ています。明治維新百年もそうです。こんなことを国家的な行事としてやるなんていうことは、けしからんと思います。憲法違反ですよ。

日本の近代の歩みとナショナリズムについて考える契機にしようと提起し「明治維新百年祭」を提唱したわけだが、このような〈国家の物語〉へと収奪されてしまったことに対して、強い違和感を表明しているのが分かる。じつは「明治百年」に関しては石川淳自身も明確に反対意見を述べている。「文化大革命に反対する声明」^③を出した際に行われた座談会で、つねに「国家主導」「権力主導」で行われるものに対して、いぶかしく思っている石川が、明治百年に関しても同じように感じていたこと

がうかがえる。

たとえば明治百年記念ということをやっていくでしょう。どうせろくなことはやらないだろうけれども。それからすぐ安保というやつが目先に見えていますね。明治百年の問題では三島君と意見が分かれるかもしれないけども（笑）。

さて、この発言がなされているのが、「至福千年」と同年であることは特筆すべきことであろう。

四、幕末・維新×〈革命〉

「至福千年」では幕末に変革の可能性を見ているのだが、野口武彦^④は「至福千年」には全共闘世代の出現と変革の夢が潰えていくさまが予見されていると言う。安部公房にしても野口武彦にしても「至福千年」で描かれる革命は見果てぬ夢のようなものとして悲観的に捉えている。しかし果たしてそうだろうか。そもそも幕末・維新を革命ととらえ、日本の近代の現状と、来たるべく社会変革の可能性について議論されたのは、「日本資本主義論争」であったが、そこでは日本の近代をどのように評価すべきかが問われていた。しかし「至福千年」ではそもそも〈維新の志士〉たちの功績そのものが無化されているため、同じ地平では語れない。

そこで、「至福千年」の刊行がされた後、青年時代に関心をもつ

たアナキズムについて石川が立て続けて言及していることを参照してみたい。例えば『文学的立場』⁽²⁵⁾の同人からのインタビューに答えて以下のように語っている。

石川 ぼくは当時浮気な若造でね、一つの主義をにかけて押し通すというほどの、こつちも偉くないんだ。だからいろんなものの雑種の思想ですね。つまりマルクシズムもかじってそれに関係するものも読むし、バクーニンも読むといったような。共産主義、無政府主義というふうにとちらか一方の本だけを専門研究したことはない。ごたごたですね。そのごたごたが当時の現状ですね。当時、一般の状況がそうだったろうと思う。

同人 あとお仕事の中から逆に推定すると、アナキズムにたいしてはわりに親近感を感じていらつしやるようですが、それはやはり大杉あたりから……

石川 大杉を読んだのは多くの中学生時分ですから。大杉のファンといったって当時は中学生ですからね。

ここで石川は少年期から青年期にかけてアナキズムに心酔していたことを語っている。また萩原延寿との対談⁽²⁶⁾でもアナキズムに対して言及している。

石川 大杉栄も研究としてはまだじゅうぶんじゃないよう

に思いますね。あの人も。アナキズムの歴史に――アナバプティスト（再洗礼派）というのがありますね、ああいう伝統が日本にないから。バクーニンにしろ、だれしろ、アナバプティストの伝統があつてやつっていることですから。大杉さんはそれはないんだ。

萩原との対談で言及しているアナバプティストは、『至福千年』の中で千年王国の樹立を企む隠れキリシタンの存在のモチーフとされている。石川はアナバプティストについて書かれたノーマン・コーン『千年王国の追求』⁽²⁷⁾を参照していたと言われている。ここでは対立する二つの隠れキリシタンのように「アナバプティストたちは他方では、アナバプティストの共同体はしばしば著しい排他性を示すことがあった。それぞれのグループ内では固い約束があったが、社会一般に対する態度は拒絶的傾向を示した」述べられており、隠れキリシタンたちが協力することなく対立しながら結局企てたが潰れてしまったことに重なる。

また乞食を引き従えて、幕府も朝廷も崩壊させようとするところも、『千年王国』を追求しようとした人々が、失業者をはじめとした（よるべきなき者）であつたことが延べられている。

失業者と組織を持たない労働者はいずれも数世紀前より多数にのぼり、いっそう悲惨な状態にあつたことを示唆する証拠が残っておる。アナバプティズムが最も戦闘的な、未

熟ながら千年王国主義的形態をとって盛んになったのは、
そのような人々の間においてであった。

隠れキリシタンのそれぞれのグループが乞食たちを革命のために利用しようとするところと重なってくる。

石川淳が戦後アナキズムにずっと関心を寄せていたかという、終戦直後のエッセイで語るように当初は共産党へのシンパシーを示していたことが興味深い。

僕の政治談は、第一に天皇制の廃止だね。隠居処をこしらえて引つ込んでもらふ、そんなのぢやない。この制度を叩きつぶす。それを一回だけみとめる。どんな話もそれから後だ。それをやらなきや駄目だ。その力あるものは共産党だ。そのかぎりで僕は共産党を支持する。(略) 天皇制廃止はひと事ばかりぢやない。自分の中にあるもの、自分の中にある権威をぶち毀すことでもあるからね。

以上の通り、戦後まもなく石川は共産党へのシンパシーを示していたと杉浦晋も指摘している。⁽²⁹⁾ だが石川が青年時代に心酔したアナキズムに再び関心を持つことになるが、その理由については山口俊雄が「左翼運動に大きな疑問符を突きつける出来事からの衝撃が、左翼運動の別なる可能性」を見出そうとしたのではないかと論じている。⁽³¹⁾

ここで本稿が強調したいのは現実的なアナキズムの運動に石川が加わるということではなく、あくまで文学(小説)の素材として昇華していくことになった点である。それが「至福千年」の末尾で、幕府や維新の志士たちの主導されるのでもなく、隠れキリシタンの首魁たちの手先にとどまることではなく、名もなき群衆が街路にあふれ出て、ええじゃないかを踊る姿へと結実されていく。

五、〈民衆〉への呼応

石川が〈歴史的空間〉を舞台にする小説を書くようになる時期と国民的歴史学運動が提唱される時期が軌を一にしていることは繰り返し言及してきたが、「至福千年」が発表された時は、国民的歴史学運動を根にした〈民衆史〉研究が生まれていく時でもあった。〈民衆史〉とは色川大吉が言うように、単純に被支配者として「民衆」を見るのではなく、歴史を動かす存在として〈民衆〉に目を向けるものであった。

石川が当時、民衆史の動きに関心をもっていたのか、実証的に明かすことはできないが、ただ前節の末尾で論じたように、この小説では最終的に誰かに指導されるのではない、動き出した名もなき群衆の姿だけが残っていくことに注目したい。

この「名もなき群衆」の存在に対して否定的だったのが、先ほど引用した座談会(33)の中での秋山駿と柴田翔だ。

柴田 政治というものは、野口さんのいうように、一人の人間を道具として扱うのだけれども、道具として扱われた人間のほうは、必ずしもそれに満足しないわけで、そのところを書くべきところで殺したという印象を、ぼくはやはり受けてしまうのです。それと、全体的に政治の対象になる大衆がこの小説には出てこない。

秋山 非人を集めているわけではないですか。その存在が感じられないんですよ。

柴田 現在の問題でいえば、よく何万人デモに参加したといえますね。そのデモに参加している一人一人は、デモの一員以上に個人個人なんで、その問題を考えなくちゃ、政治というものはやはりとらえられない。

秋山と柴田は「至福千年」の中の群衆に、意志や個性をもった個人の顔が見えないことを否定的に語っている。しかし『至福千年』では、固有名があることで他者と切り離されてしまった個人ではなくて、「ええちやないか、ええちやないか」とともに踊り、動いていくこの群衆の運動こそが変革の力として描かれていく。これは集団の中に個人の存在が掻き消されるのではなく、むしろ一人一人が、人々とのつながりと歴史の連環の中に自らの存在とその意義を見出すことに他ならない。だからこそ〈名〉を成した〈偉人〉たちが活躍する、歴史的重大事と記録されていることについても以下のように揶揄する。

「上のはう」はお代替りといふが、下のはうはあひかわはらずからつ風だ。

安政五年戊午、七月將軍家定没、十月家茂就職、大老は四月から引きつづき井伊直弼といふ仕掛は「下のはう」とつてどうといふこともない。さきをととし以来、地震コロリ志士の探索と、黒船の来たのかさなつて世の中さわがしく、やがて今年も暮れようとする十一月の末であつた。

このように幕末・維新の重大事件として記述されることになる出来事も、「下のはう」つまり〈民衆〉にとつては「どうといふこともない」と一笑にふされている。

また近代を切り拓いたと讃えられる〈維新の志士〉たちの働きも〈英雄〉視されることはない。

「すると、あなたさまは大老をたすけて幕府の側に立つおつもりか。」

「ばかな。われらはわれらの側に立つのみぢや。このわれらの側から、今日世上のあらそひを見て、去就いづれが利か。幕府の命運今や尽きた。つぶれる幕府をしてまづ天朝をつぶさしめよ。勤王を唱へる胚黒き悪人ども、名を天朝に借りて事を成さうとはかる。悪人、ほろぼすべし、この世を天朝の世とはさせるな。これぞわれらが宿願のさまたげと知れ。悪人を討たしめてのち、傷つける幕府を討つは

われらの任ぢや。われらの世となつてこそ、はじめて開国の大業は成るぞ。さしあたつて、掃部頭の政道、かへつてわれらには幸便とおもへ。かれをしてその欲するところをおこなはしめるに如かずぢやて。」

淡淡と語つて、もし遠くから見るとがあつても、ものに興じてゐるけしきとしか見えなかつた。林のはてに日だまりの木の根があつて、そこにならんで腰をおろした。

このように日本の近代の歩みを切り拓いた維新の志士たちも、隠れキリシタンたちの革命の道具にされるだけである。では革命を起こそうとした隠れキリシタンたちの指導者の企ては上手くいくのだろうか。彼らの企ては以下のように語られる。

一角がいきり立つのに、内記はみだれる色なく、
「あせるまい、一角。われらには千年會の大業があるぞ。
この大業を前にして、取引の利をあらそふときはもとより末節、松太夫ふぜいのさかしらなんぞは取るにもたらぬ小事ぢや。地上楽園やがてこの土に現ずるときは、江戸はすなはち一国として立つところえよ。江戸一国をもつて海外諸国と友好の誼を交し通商の盟を結ぶ。外国はおほむね信仰に於てわれらとひとしければ、むしろ大業を抜けこそすれ、楽土を侵すことはない。各藩かりに一時の権に擦つて来り攻めることありとも、その内輪もめは必至にて、

逆にこれを撃ちしりぞけるに苦しむまい。日本全国の乞食非人、また下賤の窮民、みなおそろくわれらに見ならつて随所に起るべきか。雄藩連合の大といへど、ふところに火が燃えれば、この江戸王国をなんとする。」

上野戦争のどきくさに乗じて〈乞食〉たちを集めて利用して「江戸王国」（千年王国）を建国し隠れキリシタンたちが支配する世を作ろうと企てる。しかしその企てもまた潰えてしまう。

〈偉人〉たちや、隠れキリシタンの首魁が亡びた後、後に残つたのは、幕府や〈維新の志士〉たちからは顧みられず、隠れキリシタンたちが道具として利用しようとした名を記されることもない〈乞食〉たちだけだった。

この〈乞食〉たちがどこからともなく江戸に集まつていく姿を、江戸から旅立つ冬嶋が見る。

山にかへらうとして町中を行きかけたとき、町にはかにざわめいて、往來のひとは逃げまどひ、女こどもは色をうしなつて軒下に駆けこみ、ばたばた戸をおろす店もあらうといふけしきに、なにごとかと思れば、かなたからくろぐろと一むれ、乞食か非人か浮浪人か、異様なもののどもの風あくまでもいぶせく、あさましく、百鬼夜行の闇を照る日の下に押し出したやうに、悪臭をはなつてひるまず、堂堂と練りわたつて来た。しかし、これが押込狼藉をはたら

くでもなく、ののしりわめくでもなく、あたりのさわぎに目もくれず、どこからどこへとも知れず、しづかに来てしづかに去り、黒い流はゆらぎ過ぎた。町のひとに聞くと、この奇怪な行列はちかごろいつと定めなく、ときには夜ときには昼、突然ふつて湧いたやうに巷にあらはれて、ただ箱根の山のほうにはむかはずに、東へ東へとながれて行つて、上役人も手をつけるすべがないといふ。冬峨はそこに立ちすくんで、遠く江戸の空の下に、これと似た行列が五街道からぞくぞくと府内にながれこむさまじいまほろしを見た。

持物もあり、氣もつかれて、そこから駕籠にして山にむかふ。垂れを揚げさせたままに、風すずしく、つい湯元を通り越さうとすると、道のほとりに男女まじりに五六人、まんなかに童女ひとりをかしづいて、これをあそばせてゐるのが見えた。どこの物見遊山の客か。その童女の顔をちらと見たとき、冬峨はおもはず聲に出して呼びかけた。

秋山駿や柴田翔は「至福千年」の中の〈乞食〉たちが「独立」した人間として描かれていないことを批判する。しかし変革の主体となっていくのはこの名もなき群衆である。どこからともなく江戸に集まった〈民衆〉が切り拓いたかもしれない、もう一つの〈近代〉のはじまりが示されているのである。

六、おわりに

「至福千年」はこのように終わる。

行列はさらにふくれあがるばかり、晴着の娘、絆纏の若いもの、番頭、丁稚、のらくらむすこ、あそびにんも加はつて、練りつづける中から、いつか囃子のやうな声があがつてそれからそれと声は鳴りひびいた。

ええちやないか

ええちやないか

これだけで歌といへたものか。しかし、とぼけたやうな、やけつぱちのやうな、このやくざな文句も、ひとのくちぐちに唱へられて、はづんだ声が巷にあふれるのを聞くと、これが囃子として合ふやうな歌がどこにありそうなどいへないものでもなかつた。

江戸に流れ着いた名もなき〈乞食〉の群衆の中に、「晴着の娘、絆纏の若いもの、番頭、丁稚、のらくらむすこ」ともとは、れっきとした素性の分かる江戸の町民だった人々が、名もなき群衆の中に進んで入っていく姿が描かれている。

ここには、安部公房や野口武彦が言うやうな、革命への絶望が書かれるのではない。むしろ、ここにはもとある立場や肩書きを捨て、秩序から解放されようとする人々が、群衆の中に入

り込んで行く姿である。変革を希求する思いが一つの群運動となつて何かを変えていくかもしれない「可能性」が示されて終わる。

それは名のある「維新の志士」たちによつて始まった、とされている「近代」とは別のあるべき姿が夢想されるのである。

注

- (1) 一九八三年八月、岩波書店
- (2) 安部公房「石川淳著『至福千年』」(『東京新聞』一九六七年三月二九日朝刊)
- (3) 河上徹太郎「石川淳著『至福千年』」(『読売新聞』一九六七年四月六日朝刊)
- (4) 菅野昭正「石川淳の方法―その近作をめぐって」『批評』一九五九年春号
- (5) 山口俊雄「石川淳「白頭吟」論―左翼運動・一九二一年と一九五六年と」
- (6) 杉浦晋「石川淳『鷹』試論―二つの「鳩」と「鷹」をめぐる試み」『国語と国文学』二〇一一年一月
- (7) 石川淳・萩原延寿 対談「歴史・人間・芸術」『問問録』一九七三年七月二五日毎日新聞社
- (8) 大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か」(『群像』一九六一年一月)
- (9) 井上靖「自作『蒼き狼』について―大岡氏の『常識的文学論』を読んで」(一九六一年二月)

(10) 福田宏年「歴史小説の『真実性』とは?―『蒼き狼』論争への私見」(『図書新聞』一九六一年二月二五日)

(11) 江藤淳、平野謙、中村光夫、秋山駿「座談会 文学・73年を顧みる」(『東京新聞』一九七三年二月一八日朝刊)

(12) 平田篤頼「まがいものの真実―『たった一人の反乱』について」(『群像』一九七四年四月)

(13) 江藤淳「『フォニイ考』考」(『文学界』一九七四年六月)

(14) 大岡昇平「歴史小説の諸問題」(『文学界』一九七四年六月)

(15) 菊池昌典「歴史小説とは何か―史実と虚構の間―」(『展望』一九七四年二月号、三月号)

(16) 『文芸』一九六七年五月

(17) 篠田一士「文芸時評」上・下(一九六七年六月二八・二九日『北海道新聞』夕刊)

(18) 山口俊雄「石川淳『至福千年』論―『愚依』の論理学・『愚依』の政治学」(一九六八年一月一六日)

(19) 自由民主党の「年度運動方針」(一九六八年一月一六日)

(20) 佐藤栄作首相一九六八年一月四日記者会見

(21) 「明治百年」問題をめぐっては、山田宗睦「危険な思想家」

(一九六五年三月、カッパブックス)において、戦後二十年の歩みを否定する「反動化」した「危険な思想家」が跋扈しており、彼らが戦後二十年を否定し、維新百年を持ち出そうしていると、「維新百年が勝つか、戦後二十年が勝つか。それはじつに日本の将来がかかっている。わたしは戦後二十年のがわに賭ける。賭けて闘

いたいと思う。そのために、戦後二十年のいま、わたしはあえて「危険な思想家」を告発した」と江藤淳らを「危険な思想家」として批判している。『朝日新聞』は「明治百年と戦後二〇年」という特集を組み、山田に批判された、江藤淳ら「明治百年」賛成派とそれに反対するそれぞれの意見を掲載している。

江藤淳『特集 明治百年と戦後二〇年』（『朝日新聞』一九六五年四月一九日夕刊）

野間宏 同（『朝日新聞』一九六五年四月六日朝刊）

(22) 竹内好「予見と錯誤」『週刊読書人』一九六六年一月二四日

(23) 安部公房・石川淳・川端康成・三島由紀夫「座談会 われわれはなぜ声明を出したか」『中央公論』一九六七年五月

(24) 野口武彦『江戸が空になる日―石川淳論2』（一九八八年六月、筑摩書房）

(25) 文学的立場同人「昭和十年代を聞く 石川淳氏」（『文学的立場』一九七二年七月号）

(26) 注（7）

(27) ノーマン・コーン『千年王国の追求』（原著一九六一）（引用は江川徹訳一九七八年一月紀伊國屋書店）

(28) 石川淳「夷斎雑談」（『近代文学』一九四九年二月号）

(29) 杉浦晋「石川淳、日本共産党、そして安部公房」（『國學院雑誌』二〇〇四年十一月）

(30) 注（5）

(31) 石川は当時担当していた、『朝日新聞』の文芸時評で（『文芸時

評 昭和四十六年二月上」（『朝日新聞』一九七二年二月二五日夕刊）、「国家なし」を夢想することができると文学の可能性について言及している。ここにも当時石川淳がアナキズムに対して再び強い関心を持っていたことがうかがえるだろう。

(32) 色川大吉「新たな民衆像の創出を―オホーック民衆史講座に寄せて」（『民衆史―その一〇〇年』一九九一年十一月、講談社）

(33) 注（16）

（ほがり・もとお／弘前大学助教・本学非常勤講師）